

第42回 信行寺仏教講座（和讃篇） ～第1首「弥陀成仏のこのかたは」～

令和6年6月16日（日）

和讃について

「和讃」とは和語で仏の徳をわかりやすく親しみやすくほめ讃えたものである。

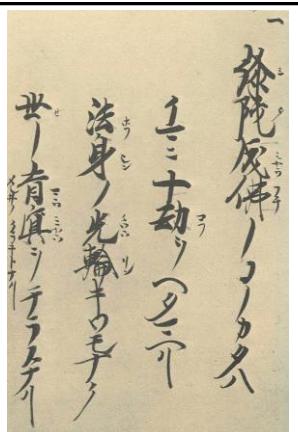
七五調でリズム感があり、内容も平易で、覚えやすいものとなっている。これより親鸞聖人が民衆への伝道を意識していたことがうかがえる。聖人が作った和讃の数は540首以上にものぼる。和讃史において、個人が制作した現存量では最多。

親鸞聖人の和讃の特徴

首尾一貫して、四句ずつで一章になっているものは極めて稀であり、しかも、原作者が四句を一単位として、何和讃何首とかいっている事は、管見においては全然ないのである。（中略）

連作の短歌のように組織する事は、親鸞聖人が創始されたものであろう。そして、この形式は親鸞聖人以後においても、その例は少ないのである。

（多屋頼俊『和讃史概説』取意）



金子大榮『阿弥陀仏偈聴記』

少なくとも一日一回は仏前へ出て、そして正信偈和讃をあげるということ、それが法義相続ということになっていくことがあります。（中略）

我々は和讃を主として初重・二重・三重の念佛を申すのであると思っておりましたが、そうでなく、勤行の場合は初重・二重・三重の念佛の方が主であって、その念佛に添えて和讃を挿読するということでしょう。



明治14年～昭和51年
明治～昭和期に活躍した
真宗大谷派僧侶、仏教思想家。
大谷大学名誉教授

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなし 世の盲冥をてらすなり

(現代語訳)

法蔵菩薩が修行を完成して阿弥陀仏となられて以来、現在までに十劫という長い時間が経過している。み仏の身体より放たれる光明は遍在なく届き、世の中の凡夫凡愚すべてを照らし護ってくださるのである。

出典

七高僧 第3祖・曇鸞大師
『讚阿弥陀仏偈』



成仏よりこのかた十劫を歴たまへり。
寿命まさに量りあることなし。法身
の光輪法界にあまねくして、世の盲
冥を照らす。ゆへに頂礼したてまつ
る。

小林一茶と浄土真宗



「すずしやな 弥陀成仏の このかたは」

※「すずしやな」= 到清涼地

「歯が抜けて あなたのむも あもなみだ」

「ともかくも あなた任せの としの」

「年もはや あなかしこ也 如来さま」

小林一茶 (1763-1828)

「一茶調」と呼ばれる独自の俳風を確立して松尾芭蕉、与謝蕪村と並ぶ江戸時代を代表する俳諧師の一人。浄土真宗に深く帰依し、仏教について多くの俳句に詠まれている。

語句説明

劫 . . .

インドの時間の単位で、極めて長い時間のこと。例えば、40里四方の石を、100年に一度ずつ薄い衣で払拭し、その石が磨滅する時間が一劫とされる。

光輪 . . .

光の輪。法身たる阿弥陀如来より四方八方に放たれ、それが輪のようであるからこのように名づけられるが、同時に輪は転ずるものであり、仏智が転じて活動するさまを光輪と言うと考えられる。

世の盲冥・・・

煩惱のために智慧の眼をさえられて、真実の理を見ることができない私たち衆生をさす。

煩惱にまなこさへられて 摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

(高僧和讃)

煩惱という色眼鏡をかけて物事を見ているわたしたちは、阿弥陀如来の救いのおはたらきに気付くことができませんが、私を救おうとしてくださる広大な慈悲は、怠ることなくこの私に向かっているのです。

法藏菩薩



【五劫思惟阿弥陀如來坐像】
[奈良・五劫院]

阿彌陀仏



【阿彌陀如來像】
[奈良・東大寺]

思惟した誓願に基づいて、兆載永劫の間、修行に励む。



長い間熟考して、自身が理想とする仏国土の構想を立てる。 (五劫思惟)

阿彌陀仏となり、はるか西に<極樂>という名の世界をおさめている。仏となって、十劫が経つ。

『仏説無量寿經』に説かれる法藏説話

ある日、国王であった法藏菩薩は師仏である世自在王仏の説法を聞いて、さとりを求め、國を捨てて、出家修行者となる。法藏は世自在王仏にさとりを開きたい旨と伝えると、仏は彼に数々の他の仏たちの国土の善し悪しを見せる。

その後、法藏は長い間熟考して、自身の理想世界を構想し、仏の前でその実現を誓う。そして、彼は、計り知れないほどの長い期間、修行に励んだ後、さとりを開いて阿弥陀仏となり、自身の国土として極楽世界を建立する。

『歎異抄』後序

聖人（親鸞）のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとりに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひし…



【国宝 親鸞聖人影像
（安城御影副本）】

二種深信（にしゅじんしん）

二種深信とは、信心を機（衆生の側）と法（仏の側）の2つの側面から説明したものである。

① 機の深信・・・

自身が罪深い凡夫であり、迷い続ける存在であると信知すること。

② 法の深信・・・

そのような私を阿弥陀仏は必ず救ってくださると信知すること。

①機の深信・・・

されば、それほどの業をもちける身にてありけるを

②法の深信・・・

たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

「機の深信」と「法の深信」は、二つの事柄が別々に存在するのではなく、一つの信心の内容を衆生（機）と仏（法）の側で表現したものであるから、古来より「二種一具（この二つは一つのもの）」といわれる。

自らに目を向けたとき、どうやっても救われがたい自己の存在がそこにあり、一方で仏に目を向ければ、どこまでも自分を見捨てられることなく必ず救われる存在であることに気付く。つまり、絶対的に否定される自己が、仏によって絶対的に肯定されるのである。以上のように、逃れられない煩惱を抱えた存在と信じる機の側面と、煩惱を抱えた衆生を必ず救うという法の側面が結びつくのが、親鸞聖人の信心の内実といえる。

このような親鸞聖人の信心観について、日本を代表する哲学者・西田幾多郎（1870～1945）は、「絶対矛盾的自己同一」と表現した。



西田幾多郎

京都大学名誉教授で、京都学派の創始者。著書の『善の研究』によって西田哲学を確立。西洋の哲学者にも大きな影響を与えた。

阿弥陀仏の誓願（四十八願）

第十二願・・・光明無量の願

わたしが仏になるとき、光明に限りがあって、数限りない仏がたの国々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

第十三願・・・寿命無量の願

わたしが仏になるとき、寿命に限りがあって、はかり知れない遠い未来にでも尽きることがあるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

「阿弥陀仏」の名前に込められた意味

アミターバ (Amitabh／無量光)

「限りなき光をもつ者」

⇒ 空間的無限（どこでも）

アミターユス (Amitāyus／無量寿)

「限りなき寿命をもつ者」

⇒ 時間的無限（いつでも）

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり
⇒ 寿命無量の徳を讃える（いま）

法身の光輪きはもなし 世の盲冥をてらすなり
⇒ 光明無量の徳を讃える（ここ）

「いま・ここ・わたし」に届いている救いに
出遇えたよろこび